

イギリス初期地方銀行の成立について

荒井 政 治

(一)

かの著名な信用理論家ソーントンの時代には地方の個人銀行が発達した結果、「貨幣を受領したり支払つたりすることは、今では中流の事業家でさえ、最早自宅では行つてはいない、むしろそれは銀行家の手に委された別個の業務の部門」(Henry Thornton, *The Paper Credit*, 1st ed. 1802. p. 164. 訳一七五頁)となつていたといわれる。そしてソーントンは彼の時代の地方銀行の功績について、「英蘭銀行と同じように、地方銀行はそれぞれの紙幣の発行を通じて、わが国の生産的資本に追加をなすのであるから、彼らも亦非常に有益であつた。こうした追加を得たことによつて、疑もなくわが国の製造工業は甚だしく

拡張されたし、外国貿易は手広くなつた」(Thornton, p. 167. 訳一七八頁)と。ソーントンが地方銀行について「このように述べたのは一九世紀の初頭であつて、産業革命の真只中においで

イギリス初期地方銀行の成立について (荒井)

であつた。当時の彼のこうした敘述は決して誇張ではなかつた。實際この時代のイギリス経済の異常な拡大の基礎には、それを可能ならしめるような金融組織(イングランド銀行—ロンドンの個人銀行—地方の個人銀行)が横わつていたのであつて、われわれは初期地方銀行が資本の蓄積とその移動に果した貢献を正當に評価しなければならぬ。

本稿は初期地方銀行史に関する最初のまとまつた研究であると考えられる。L. S. Pressnell, *Country Banking in the Industrial Revolution*, Oxford, 1956. を中心に、イギリスの地方銀行がどのような源泉から何を契機として生れてきたかを概観したものである。

(二)

ソーントンの '*Paper Credit*' が出版された当時、地方銀行は、

五九

イギリス初期地方銀行の成立について(荒井)

まだせいぜい半世紀の歴史しかもつていなかつたといえよう。というのも地方銀行は一般に一八世紀後期の産物だつたからである。これはスコットランドの銀行業に較べて約一世紀半、ロンドンの銀行業に較べて約一世紀遅れていたことを意味する。今日、地方銀行に関する原資料は乏しく、営業帳簿その他の文書類も大部分が消失しているといわれ(Pressnell, p. 3 以下頁数のみ示す)、従つて地方銀行の起源を正確に把握することは決して容易ではない。それに後述するように一八世紀の地方銀行時にはロンドンの個人銀行すら一の中には銀行業の外に他の事業を兼営することが多かつたことも、その一つの理由である。さてイギリス最初の地方銀行が何時どのような形で存在したかは必ずしもはっきり分つてゐるわけではないが、例えば W. R. Bisschop, *The Rise of the London Money Market, 1640—1826*, 1910. pp. 149—50 や R. B. Westerfield, *Middlemen in English Business, particularly between 1660 and 1760*, 1915. p. 382 は「石鹼燻燻商人のジェイムス・ウッド(James Wood)が一七一六年頃に設立した Old Gloucester Bank を以て地方銀行の嚆矢となし、その後一七三七年にスチブンソン(Stevenson)なる者が Stafuord に地方銀行を設立するまで、地方銀行

六〇

としては、それが唯一の存在であつたという。誰もが引用するエドマンド・パークにしたがえば、一七五〇年のイギリス(スコットランドを含まない)にはロンドン以外に銀行の店舗(Banker's shop)は一、二あるなしという程の振わない状態であつた。しかし一八世紀後半期の利子率の低下の時期に次第に増加してゐる。一七七二年に至つて漸く倍増した(Bisschop, p. 150)とみるビショップの計算は、何を根拠としたのか詳らかでないが、この推計は過小のようである。地方銀行の最初のリストは Bailey's British Directory for 1784, London, 1784. で、これには一八九の銀行が記録されている(p. 6)。この種のリストはその後も現われ、一八〇八年以後は発券銀行が政府の認可を必要とするにいたつたので公式の統計も或る程度は可能になるわけであるが、これらの資料が示す地方銀行数は必ずしも一致しないのみか、或るものはかなり大きな開きを示すこともあつた(pp. 8—11)。こつた資料の上の多少の困難もあるが、それらの数字によれば一七八四年から対仏戦争の起つた一七九三年までの一〇年足らずの中に地方銀行数は、実に三倍近くに増加している。このことはソーントンの次の敘述にも表われている。すなわち「地方銀行の大きな増加はアメリカ戦役と今次の

戦争との間に横たわる期間において起つた、而も主としてその後期に生じた。それはわが国の商工業も農業もまた人口も、甚だ著しく増進したに違いない一時期なのである」(Thornton, P. 154, 訳一六七頁)と。かくて一七八九年から一八一五年にいたる地方銀行の全盛期(p. 86)がこれに続く。ナポレオン戦争の終結時は、この全盛期の絶頂であつて、その頃には発券銀行の認可をうけた銀行の存在しなかつた州は僅か三州で、二六州は一〇以上の銀行を有し、ヨークシアのごときは六四行、デヴォン、サマセットはそれぞれ四〇以上の銀行をようしていた(p. 10—11)。それ以後、地方銀行は衰退に向い、一八二五年の恐慌はこの傾向を決定的にし、さらに鉄道時代の訪れとともに市場が拡大するに及んで、もはや小資本で局地的な地方銀行は存在の意義を失つてしまつた。

以上ごく大まかに地方銀行の展開過程を一瞥したわけであるが、ここでは地方銀行の発展と産業革命との連関について次のようなことが言えよう。古典的な産業革命の始期は通常一七六〇年とされており、作業機の諸發明を以て始まるわけであるが、しかしそれが現実にイギリス経済に重要な影響を及ぼすまでには、なお若干の時間を要するわけであつて、このことは種々の

イギリス初期地方銀行の成立について(荒井)

視点から眺めることができよう。いま金融面、特に地方銀行の発展の面から見た場合、このことは可成りはつきり現われており、地方銀行が目覚ましい躍進ぶりを示し始める一七八〇年代を、産業革命が軌道に乗つて本格的に巨大な前進を始めた時期だと解してよいであろう。

イギリスでは金融業務上の種々の技術は大体一七世紀の金匠銀行家によつて成し遂げられ、それを継承した一八世紀には最早それに付け加えらるべきものは殆んどなかつた。従つてこの時代の地方銀行業においても技術的には、革新というよりはむしろ従来のもを一層専門化したという方が適切である。預金の受入・貸付は勿論だが、小切手がまだ普及していなかつたこの時代においては、手形の取扱は特に重要であつたし、発券はラシカシア及びウェスト・ライディング以外では大部分の地方銀行の業務であつた。その他有価証券に対する投資も行つていた。しかしイングランド銀行が株式組織の銀行業を独占していたので、これら地方の個人銀行が完全に独立した専門業務となることはかなり遅れたのも止むをえない(このことはロンドンの個人銀行についても当はまることであつた)。それで既に指摘しておいたように、初期の地方銀行は一般に他の事業と結合し

イギリス初期地方銀行の成立について（荒井）

た形態をとつていた。というのも銀行業務は、本来営んできた事業が、その機能をさらに拡大発展させた結果として生まれたからである。かような発生事情は最初の銀行家の営業政策やその後のイギリス銀行業の伝統に大いに影響することになった。

(三)

次に地方銀行の成立過程について述べよう。早くから地方銀行の成立過程は概して次のようなものとして考えられてきた。まず地方の有力な商人が日常の業務を営む中に彼とロンドンの商人或は個人銀行家との間に継続的な特定の取引関係が生まれる。この関係は自身の手形を処理する上に極めて便利であつた。間もなく友人や近くの商人から手形の引受を依頼されるようになる。このサーヴィスが頻繁になつて手形の取扱が有利な事業であることが分ると、彼は顧客を吸引するために「銀行」の看板を掲げる。彼は地下室に金庫をもち、顧客のために安全な保管者となるとともに、それを自己の事業に或は第三者に対する貸付に利用して利子を支払うようになった。それまで商人銀行家として本来の事業と銀行業務が共に営まれてきたのが本来の事業が衰退し、銀行業務の方が次第に独立し優勢になつてきて遂に純然たる銀行家に成長する、という順序である(Bischop, pp.

六二

146-7; Westfield, p. 383)。例えばリヴァプールの初期銀行史を著した Jhon Hughes はいう、「リヴァプールの銀行家は大部分が一般商人の出であつて、少数の者が茶商人、一人がリンネル商人の出であつた。大抵の場合、銀行家の名乗をあげた後も従来の営業が銀行業と相並んで営まれた。つまり彼らは主として銀行家なんだが副業をもつていた。しかしもつと成功した銀行家は次第にさような複雑さから脱けだして専ら銀行業に依存するようになった」(J. Hughes, *Liverpool Banks and Bankers*, 1760—1837, 1906, p. 38) と。言いかえれば商人銀行家(trader-banker)から純然たる銀行家(Banker pure and simple)になつたわけである。「小売商人から卸売商人へ、それからさらに銀行家へ」というのが、この時代の銀行家の典型である」(Hughes, p. 57)。しかし、そうであるにしても現実に初期地方銀行史に登場してくる個々の人物は実に多種多様であつて、例えば商人層一つを考えてみても、そこにはプリストルで外国貿易に従事した大規模商人から農村の穀物仲買商・家畜商・羊毛商人あり果ては小売商人から居酒屋の主人に至るまで種々の業者がいたわけである。プレスネルは一見極めて錯雑したこのような様相を整理して、地方銀行の起源を工業・金融代

書人業・送金業務の三つに分類している。以下それぞれの源泉について考察してみよう。

(四)

A 工業

産業革命の影響が大きかつた部門は恐らく金融の必要も大きかつたに違いない。従つてそのような部門から多くの銀行家が輩出するのは当然のことと言わねばならない。企業心に富んだこの時代の工業地帯の企業家達は購入した原料の支払、ことに多くの労働者に対する賃銀の支払に、常にその地方で支払手段を調達する必要に迫られていたこと、時には企業家の内部にすでに蓄積した豊かな富に支援されて金融業務を始めることが多かつたのである。実際、産業革命期を通じて通貨の不足は甚だしく、まことに歎かわしい状態にあつた。その最も大きな原因としては、テムポを速めてきた一八世紀後期の経済に対して造幣所も政府も通貨の供給に失敗したことが挙げられる(D. P. 15)。すなわち一八世紀には銀貨・銅貨とも殆んど鑄造されておられない状態である。これら小額面の貨幣こそ賃銀の支払には不可欠の支払手段であつたに違いない。政府が小額鑄貨を継続的に鑄造し始めるのは一九世紀の二〇年代に入つてからのこ

イギリス初期地方銀行の成立について(荒井)

とであつた。イングランド銀行券も一八世紀には重要な支払手段であつたことは間違いない事実だが、イングランド銀行がスレッド・ニードル街に閉ぢこもつたままで、まだ「ロンドン銀行」のニックネームを附けられていた時代のことであつたら、イングランド銀行券もロンドン以外では納税とか公債の払込などの外は余り利用されていなかった(拙稿「クラッパム・英蘭銀行史について」関西大学経済論集一の三・四号所収参照)。たとい地方に浸透していたとしても対仏戦争まで最低一〇ポンドという額面金額は、賃銀の支払には、殆んど役立たなかつたであろう。さらに一八世紀末一〇年ほどの間、支払手段の不足は一層甚しかつた。それには次のような特別な理由があげられる。先づアメリカ独立戦争後の不況から立直つて信用と小額貨幣の需要が頓に拡大したこと、にもかかわらず一七九三年の恐慌の結果おそらく四分の一の銀行が閉鎖したために銀行券の発行と信用が俄かに収縮したこと、戦時財政と外国為替の逆調によつて中央銀行の金の流出が目立ち、それに加えてフランス兵上陸の風聞が伝わつて遂に正貨の支払が停止(一八二二年まで)されたことである。もつとも支払手段の不足は以上のように通貨の供給面にのみ原因があつたのではない。例えば当時におけ

イギリス初期地方銀行の成立について（荒井）

工場の立地条件などにも一斑の原因があつた。初期の繊維工場は水力の便と、鉱山業や金属工業は原料資源と、それぞれ密接に結びついており、従つて工場や熔鉱炉はしばしば金融機関に恵まれない場所に設置されていた。要するに一八世紀後期の、それも産業革命が軌道に乗つて動き出した時期に企業家の支払手段に対する強烈な要求が、時には内部の資本蓄積に援けられて、本来の工業経営と並んで銀行業を開始せしめるに至つたのである。次に銀行業の重要な源泉であると考えられる幾つかの工業部門について例を挙げておこう。

鉱山業および鉄・鋼業―パーミンガムの鉄工業者サムスン・ロイドはボタン製造業者のジョン・テイラーとともに一七六四―五年にロイド銀行を創設している。鉄工業者ジョン・ウィルキンソンはすでに一七八七年に私鑄貨幣を発行しており、一七九二年の貨幣払底の折には自分の鉄工所で紙幣を発行した。これはその後広く受入れられたという。そして一七九三年には取引のあつたシュルーズベリ銀行のパートナーになつた。このシュルーズベリ銀行にはウィリアム・レヌルズ(W. Reynolds)がパートナーになつていたが、彼も著名な鉄工業者であつた。レヌルズ家がパーミンガムで専門の銀行家になつたのは古く一七六

六四

五年であつたという。かのキャロン工場の創設者を出したシェフィールドのローバック家も一七七八年に銀行家になつた。南ウェールズのニューポート、カーディフ、Caerleonなど臨海都市にナポレオン戦争中および戦後に生まれた銀行も重工業家の創設したもので、イングランドの場合と同様、預金銀行というよりは発券銀行であつた。この外、鉄工業者で銀行家になつた例は多い。トゥルローの 'Miners Bank' と 'Cornish Banks' は、それぞれ一七五九年と一七七四年に設立された発券銀行であるが両行のパートナーはコーンウォールの銅鉱業に関係していた。サンダーランドやニューカッスルの銀行にもパートナーの中に炭坑や鉛鉱の関係者がいた。銅工業部門ではパーミンガムのボタン製造業者であつたジョゼフ・ギビンス一世が一九世紀の初めに他の金属業者と協同してパーミンガムとスウォンジ―に銀行を開いた。錫部門ではウェールズから Carnarthen Furnace Bank を出している。この所有者ジョン・モーガンはすでに九〇年代に自分の事業の必要のために多数の私鑄銅貨を発行したが後に専門の銀行家になつた (pp. 18—28)。

繊維工業家―綿工業のランカシアでは一七七一年に設立された Byrom, Sedgwick, Allen, and Place 商會がマンチェスタ

―最初の銀行とされている。産業革命の中心地にしては銀行業の創設が遅いのであるが、それはランカシアでは小額手形が普及していたことと多くの業者がロンドンの個人銀行と取引があつたために他の地方で地方銀行のなしたことを自ら営んでいたからだと考えられている。それはともかく、マンチェスター最初のこの銀行を設立した四人のパートナーの中、少くとも一人は

基盤織綿布の製造業者であつたといふ(J. A. P. Wadsworth and J. de L. Mann, *The Cotton Trade and Industrial Lancashire, 1600—1780, 1931, pp. 248—9.*)。サー・ロバート・ジュール

一世は有力なキャリコ捺染業者であつたが、彼は一七九〇年頃マンチェスターに Peel, Greaves & Co. という銀行を設立した。他の地方では、麻とウーステッドの製造業者であつたクエーカー教徒のバックハウス家が一七七四年にダーリントン銀行(タラム)を、帆布製造業者のサンダース父子は一七七九年にウィットビーに一銀行を設立した。イースト・アングリア地方ではノーリッチでグアーニー家が一七七五年にグアーニー商會という大銀行を創設し今日のバークレイ銀行の祖となつた。南部でも一例えばベアリング家のごとく多くの毛織物業者が銀行家になつたが、それは本来の營業を拡張するためと、今一つ

イギリス初期地方銀行の成立について(荒井)

には相対的に衰退しつつある毛織物工業よりも一層有利に資本を利用するために始めたものであつたという。ミッドランド諸州では、例えばレスター・シアのメリヤス業者や紡績業者の中から有力な銀行家が輩出している。

醸造業―金属工業や繊維工業の外、多くの銀行家を出した工業といへば醸造業が唯一のものであつた。当時ではビールで食物を流し込む習慣があり。自家醸造の風は次第に衰えつつあつた。しかも産業革命期の顕著な人口増加にもなつてビールの需要は一段と増加してきた。もともとこの工業は多額の資本を要する事業であつたが、需要の増加につれて企業内部の資本蓄積は進展し、他方、新たに醸造業の認可をうけた人数が余り増加してないので一業者の経営規模はますます大きくなつたと考えられる。この工業も他の工業と同じように信用取引の上に成立つていたので信用技術に長じていたに違いない。また多くの場合彼らは同時に麦芽製造人でもあつて、麦芽に対する内國消費税は、名目上の納期と實際上のそれとの間には数ヶ月の隔りがあつたので、その間の操作もまた銀行業務への一誘因となつた。かくて南部や東部の穀物地帯には一七九〇年代の初めには少くとも二人の醸造家銀行業者がいたことは確かであると

イギリス初期地方銀行の成立について(荒井)

らう(p. 35)。

B 金融代書人業務

地方銀行家の第二の源泉は法律家である。元来、取引上の契約書・遺言状・譲渡証券・抵当証文等の法定の公式書類の作製を専業としていた代書人(scrivener)はエリザベスおよびジェームズ治下のロンドン金融市場で注目された存在であり、一七世紀の論者は彼を金融代書人(money scrivener)と呼んでいた。

リチャーズ(R.D. Richards, *Early History of Banking in England*, 1929.) やローニー(R.H. Lawney, *Wilson's Discourse upon Usury, Introduction*, 1925.) などもに彼をイギリス銀行史上の最も早い先駆者とみなしている(拙稿「テューター及びステュアート朝における金融業」関西大学経済論集・三巻・商学研究・所収参照)。弁護士(attorney)もまた前者と同類の職業であるが、一八世紀では普通の attorney と専門の money scrivener との間には實際上、明確な区別はなかつたといわれ(p. 38)。¹⁾ その職業と社会的地位からして一八世紀農村の経済生活において要人の地位を占めていた。農村の余剰資金を取扱つたのは主として彼らであつた。農村には地主・農業家・牧師・その他小金を貯めた未亡人・未婚婦人など遊金を抱えて有利

六六

な投資の途を求めている人々がいた。貴族やジェントリーの広大な地所から定期的の上つてくる地代収入は差配人の手を通じてロンドンに送られ、ウェスト・エンドの個人銀行に流入することも多かつたに違いない(D. M. Joslin, 'London Private Bankers, 1720—1785' in *Ec. H. R.* 1985 p. 175ff.)。やがちなルートをもたない大部分のものは、その地方で投資先を見出すことができた。農村における投資の主な対象は (1) 政府証券や事業会社株 (2) 土地 (3) 交通改良事業などであつた。不動産抵当の媒介に農村の法律家が重要な役割を果したことは一七世紀と何ら変わるところがない。ここで特に重視したいのは第三の投資との関連においてである。一八世紀後期の地方銀行の成長が、間接的だが時には強力であつた地方投資のブームと時を同じくして起つたことは興味深い。

¹⁾ *Money Scrivener, Attorney*。
有料道路組合(それに有料橋梁組合)は議会の認可をえて道路の建設と維持を営利事業として営む団体であるが、議会がこのような団体の設立を認可した私法律の数は一八世紀前半期には四〇〇であつたが、五一—一九〇年には一、六〇〇に達している(小松芳喬・英国産業革命史・昭二八・一六四頁)。また産業革命の原動力となつた鉄・石炭の大量輸送に伴つて一八世紀後期

には運河の開き盛んになり一七八〇—一八〇〇年には、いわゆる運河熱の時代が起つて、この間に今日のイギリスの運河網はその大部分が出来上つたという。この種の交通改良事業は何れも大資本を要するのであるが、有料道路の場合は大部分その地方のジェントリー・農業者・牧師・その他小金を貯えた人々から借款によつて創設資金を得、通行料収入を担保に追加資本を得た。運河の場合も資金ルーツはほぼ同様であつた。もつとも時にはロンドンおよび地方の個人銀行の支援をうる場合もあつた。何れにしても議案に法案を出すまでの諸手續、所要資本の蒐集およびその管理は、これら地方の法律専門家の手に一任されるが多かつた。こうした関係から attorney は有料道路組合や運河会社の収納係として多額の資金を掌握し、運用する機会に恵まれたわけである。また Attorney は、しばしば囲込委員(enclosure commissioner)に選任された(p. 40)。当時いわゆる第二次エンクロージャー運動が急速に進行していたことは改めて云うまでもない。囲込一件に関して、多くの場合二、〇〇〇ポンド前後の金が費やされたが、これが囲込委員の手を通じたと考えると、ここにも attorney が金融業にスタートする機会があつた。ではこうした地方の法律専門家は実際に

イギリス初期地方銀行の成立について(荒井)

どれほど銀行家に成長したであろうか。一七八四年の Bailey's British Directory には一一九のイングランドの銀行が収録されているが、このうち少くとも五人の attorney がいたといわれ、また一〇年後の一七九四年の Universal British Directory には二九一のイングランドおよびウェールズの銀行のうち少くとも三六人の attorney がパートナーとして含まれていたという(p. 44)。しかしこうした attorney-banker は、一九世紀に株式銀行が発展し、より進歩した銀行技術が普及するにいたつてその存在の意義を失つてしまつた。

C 送金業務

一八世紀後期、イギリス商品の流通機構においてロンドン市場が占める地位は絶大であつた。「イギリス各地の生産物(純然たる地方市場向けのものでない限り)を購入したものは、ロンドンに店舗を構え、ロンドンの銀行に口座をもっているマーチャントないし卸売商人であつて、たゞその特定の商品がロンドン向けのものでなくても、或はロンドンで売買されなくともさうであつた」(R. G. Hawtrey, 'British Banking and Finance, 1793—1931' in E. Eyre ed., *European Civilization its Origin and Development*, 1937, p. 505)といわれる。こ

イギリス初期地方銀行の成立について（荒井）

うしたロンドンを中心とする農産物や工業製品等の活発な商品流通に平行して信用の動きがあるわけであるが、この外にもロンドンと地方の間の投資、配当金の受領、小銭の調達、諸税の支払等に関連して手形や現金の動きが起るわけである。本来の事業の性質上、以上のようなロンドン・地方間の送金業務が日常業務として頻繁に行われ、信用技術に長じた者の中から銀行家が出現することは自然の傾向であつて、プレスネルは、かような観点から小売・卸売の商人、と財政収入の送金人（集税人）に銀行家の第三の源泉を求めている。

小売商人―「男も女も商売で小金を貯えたほどの者なら誰でも隣人に対して銀行家としての営みを始めるのに殆んど何の障碍もなかつた」(W. H. B. Court, *A Concise Economic History of Britain*, 1954. p. 90) 時代のことであつてみれば、小売商人が銀行家になつたとしても決して不思議ではない。しかし一八二五年の大恐慌の直後にリヴァプール卿が「しかしながら資力のない小商人、食料品商、或はチーズ小売商が何処でも銀行を開いたであらう」(p. 12)と発言したり、またソントンが「小売店主にしても彼は自分の商取引の目的上、ロンドン宛の為替手形を振り出したり、その手形を同地へ送附したりする習慣

六八

をもち、…時によると顧客達のロンドン宛手形を受取つてその人たちに金を与え、その手形を自分の他の手形と混ぜてロンドン為替取組先に送るのを慣わしとし、」遂には顧客を吸引するために戸口の上に「銀行」と彫りつけ、手形振出しに用いた合札にもそれを刻み込んだ(Thornion, P. 155—6 訳一六八—九頁) というのはやや誇張であつて、一七八四年の銀行家のリストその他によつても小売店主が銀行家に成長した例は乏しく、かつ多くは極めて短命であつたと考えられる。

卸売商人―すでに述べたように地方銀行家の出自として最も典型的であり、最も豊かな源泉となつたのは卸売商人のグループであつたと思われる。彼らは営業上、ロンドン市場との間に信用取引を行う機会が多かつたからである。織物・鉄それに石炭など高度に地域化した生産物を扱う呉服商・絹織物商・金物商・石炭商などは常に遠隔地との間に信用取引を行つていたので、今少し営業を拡大すれば銀行家になりえたわけである。わけでも織物商は最も成功的であつて、一八世紀末には少くとも三六の銀行を経営していたといわれる(p. 61)。次にリヴァプール、プリストル、ニューカッスルなどの商業都市が多くの商人銀行家(merchant-bankers)を輩出したことは想像される通り

である。それらの中には西インド貿易やアフリカ貿易（奴隷貿易を含む）に従事した特権的貿易商人が多く、また輸入品を扱う茶商やブドー酒商もいた。かくてリヴァプールでは一四の主な初期の銀行のうち一〇が商社から発展したものであり、ニューカッスルでは初期の銀行の半分が、またプリストルでは殆んど大部分の銀行が、商人をパートナーとしていた（p. 49—50）。この外、重要性はずつと低いが船主・木材商・穀物商なども若干の銀行家を出している。また地方銀行の出自に関して C. R. フェイ(C. R. Fay, *Great Britain from Adam Smith to the Present Day*, 1st ed. 1928. p. 109) 以来よく引合に出されるものにウェールズの家畜商がある。彼らは他の地方に債務を負っている人々から送金の依頼をうけて貨幣を託されるとそれを家に残しておいて、スミスフィールド市場(ロンドンの家畜市場)での売上金の中から債権者に支払い、現送に伴う危険を避けていた。こうした慣習がやがて彼らを銀行家にしたのであって、一八世紀末に設立されたランドウベリの黒牛銀行 (*the Black Ox Bank*) やアバリストウイスの黒羊銀行 (*the Black Sheep Bank*) がその例であるという。なるほどウェールズの家畜商は地方銀行の源泉ではあつたが、しかし彼らを以てイ

イギリス初期地方銀行の成立について(荒井)

ギリス地方銀行の生みの親と考えるならば、それは明らかに誤りである。

集税人—送金業務を通じて地方銀行家に成長した第三のグループは地方の集税人 (*tax collectors*) である。彼らが地方銀行家を出す源泉となつたことは早くから指摘されていた(例えば *Bischoff*, p. 147)。彼らが銀行家に成長する機会を与えたものは当時の租税徴収機構にあつた。すでにウィリアム及びメアリの時代には、戦時の財政膨脹によつて地方からロンドンに送金される額は著しく増加しており、地方から貨幣を吸上げれば地方では通貨の不足を招来するであろうとの見地から手形による送金が認められたという (*Bischoff*, p. 147 f.n.)。ところで租税の徴収機構は一八世紀の後期になつても未だ多分に中世的であつて、内国消費税や関税の方は可成り近代になつていたが、地租及び賦課税、印紙税の徴収者は政府の役人ではなく、いわば臨時に任命された名譽職であつた。これら名譽職の集税人は管轄地域の税を徴収すると、主として手形でロンドンの代行機関へ送る。代行機関は恐らくイングランド銀行券で政府に払込むわけである。しかし集税人は徴収した税を直ちにロンドンに送る必要はなく、納入まで一年間の猶予が認められて

イギリス初期地方銀行の成立について（荒井）

いた。一八二一年に全国的な財政調査が行われたとき、調査委員会の報告によれば、租税収入は一般に約六週間、集税人の手許に保留されていたという（p. 88）。政府がこうした猶予期間を認めるには二つの理由があつた。一つは当時の地方の金融機構からすれば、確実に条件のよい送金手段（手形）を入手するには可成りの困難があつたであらうということ、今一つは地租集税人が受取る徴収手数料（poundage）は報酬としては十分であつたからである。かくて集税人は常に何千ポンドかの大金を手許に残すことを許されて、有利に投資する機会を得た。

これはすい分有利であつた。ポルトンの著名の事業家トーマス・マースデン（Thomas Marsden）の成功が、公金取扱人であつたという事実に負うところが大であつたことは周知の通りである（Wadsworth and Mann, p. 93）。一八世紀後期、政府支出の増加に伴つて租税も増加し、これが刺戟となつて集税人から銀行家上昇する者が現われてきた。或る場合には恐らく地租収入が銀行設立の基礎となつたであらう（W. R. Ward, *The English Land Tax in the Eighteenth Century*, 1953, p. 164）。一七八四年の銀行家のリストには少くとも六人の集税人が含まれていたし、ナポレオン戦争は、さらにこの傾向に拍車をかけ

七〇

ることになつた（T. S. Ashton, *An Economic History of England, the 18th Century*, 1955, p. 182）。そして集税人→銀行家の傾向は一八二四年の税制改革によつて、その基礎を失うまで続いたのである。以上

附言

本稿は別稿「イギリス産業革命と銀行組織」（矢口孝次郎編「イギリス資本主義の展開」有斐閣近刊・所収）を補うものである。併せて読んでいただければ幸である。

（一九五六・九稿）

執筆者紹介

澤村 榮治	本学教授（経済学部）
東井 正美	本学助教授（経済学部）
荒井 政治	本学助教授（経済学部）
矢口 孝次郎	本学教授（経済学部）